ガバナーメッセージ

“温故知新と不易流行”

ロータリー創立に因んで

国際ロータリー第2710地区
ガバナー　諏　訪　昭　登

世界理解月間によせて

2月23日は「ロータリー創立記念日」とされ「世界理解と平和の日」そして2月23日から始まる週間を「世界理解と平和週間」に、さらに２月は「世界理解月間」として意義づけられています。ロータリアンである英国の元首相ウィンストン・チャーチルは「過去を知らずして未来を語ることは出来ない」と言っています。西洋の偉人も東洋の先人も時代こそ違っても、同じような至言を述べていることに感嘆します。東洋では「温故知新」がそれであるし、さらに「不易流行」をつけ加えれば過去、現在、未来への教訓として、最も大切なフレーズだと思っています。今月は我らの愛するロータリーが、104周年を迎えるのに因んで、その創成期からの発展を回顧して未来思考への参考の一端としていただこうと思います。

1905年2月23日 （木）、36歳の独身の弁護士ポール・Ｐ．ハリスをリーダーとする４人の仲間はシカゴ市ノース・ディアボーン街127番地ユニティビル711号室に集まった。ポールの説く友愛と相互扶助を基本とした新しいクラブのアイデアに、一同大いに賛同しここにロータリーの曉が訪れたのであった。冷く凍てつくような夜のシカゴでも、彼ら４人の胸は暖かい交情と明日への夢で大きくふくらみ、これがロータリーの誕生となった。ポールはこの出来事を「湖畔の一都市で始まった一場のドラマ」と言い「ディアボーン街の奇跡」とも語っている。この４人は「ロータリー４人の使徒」と言われ、104年前の今月23日にロータリーの創立という歴史的会合をしたのである。第二回会合（3/9）、第三回会合（3/23）と続きいろいろな取り決めを行い、クラブ名も決定した。ポールの「This Rotarian Age」（ロータリーの理想と友愛）の中で、初期会合を会員事業所輪番制で（６回会合まで）行ったことからロータリー・クラブと初代会長のシルベスター・シールが名付けたと語っている。

国際ロータリーは2月23日をロータリー創立記念日として居り、最初のクラブであるシカゴＲＣはROTARY／Oneと名乗り創立の日として居る。

シカゴ万博後の大不況、ギャングの横行、手段を選ばぬ商行為という倫理感、信頼関係の欠除など、殺伐たる時代背景でロータリーは誕生したのであった。大都会に住む一般の人々が感じる孤独感と阻外感に加えて、ビジネスマンには苛酷な自由競争に敗れるかも知れないという恐怖感がつきまとっていた。逆説的に言えば、そんな環境なればこそ心の通い合った友人達と巡り合い、胸襟を開いて語り合うために定期的に集まることが出来たら、どんなに心が安らぐことだろうかという発想が浮んだとも言えよう。「灰色の都会が無性に侘しい」「信じ合える友人が欲しい」「同じ思いの人が沢山いるに違いない」。

シカゴで独身青年ポール・ハリスがロータリー・クラブを作ることを思いついたのは罪悪と腐敗の街に住みながら、その街の中に彼が少年時代を過ごしたニューイングランドの村（バーモント州ウォーリングフォード）で感じた安らぎを取り戻そうとする実験でもあった。紙面を少し取ってここに触れたのは、この辺りがまさしくロータリーの心の原点と思えるからです。話し合いの中では「良質の職業人が定期的に集まる」「同業者がいると利害関係で親睦が阻害されるので、一業一会員制」、この精神は104年の歴史を通じて思考体系や管理運営などが変化する中で、現在まで大切に守られているロータリー運動を成立させるための必要条件である。そして特筆すべきことは、極く普通の街の弁護士を中心に決して高い学歴とは言えぬ平凡な商店主や中小企業の経営者が集って、ロータリー・クラブが発足したことである。日本では1920年、東京ＲＣが創立された時の特別な事情で、当時の超エリート達が集ってスタートしたが、元来ロータリー・クラブのメンバーはそうではなく、ロ

ータリー運動に加わってそれを通じてエリートとなって行ったことを忘れてはならないのである。ロータリーは今も将来ある人材を求め続けている。

さて、ロータリーは斯くの如く「一業種一会員制」「定例会合」を原則とした社交クラブとして発足した。会員は加速度的に増加して行った中で、極く初期の会合で決定され、現在でも継続されている大原則が数々あることに驚かされる。列挙してみると、

① 一業種一会員制（1905.2/23）
② 例会出席義務（1905.2/23）
③ 職業上の相互扶助(1905.初期)1912年に廃止され情報交換機能へと転換。
④ 会務互譲の法則（1905）1年交代制。
⑤ 会合時間厳守（1905）
⑥ クラブ内における政治上、宗教上の論争と団体行動の禁止（1905）
⑦ ニックネームで呼び合う（1905）
⑧ 例会場を定例場所として食事する(1905.5/18)
⑨ 会員卓話の習慣(1905.3/23) シールが最初。
⑩ エンブレム（徽章）の制定（1905.3/23）最終的に現在と同じとなったのは1923年。
⑪ 歌を合唱（1905.秋）ロータリーソングの始まり。
⑫ 写真入り名簿(1908) 当時としては画期的。
⑬ 理事会の先議権(1909) 例会で勝手な決議をしたことで大きな紛争を生じたから。
⑭ 党中党派を作らない（1910.10月）

その他ファイン、家族会などがある。

とは言え、ロータリーが発足当初から奉仕概念が芽生えていたわけではなく、限定会員制の社交クラブとしてスタートしたわけである。特に互恵取引は大いに進行し、お互いに背中を掻き合う“back scratching”の状況が繁盛しており、いわば自己中心的な相互扶助のグループが現出された。しかしながら、身勝手なことがいつまでも続く訳が無く、一般の人からの非難が日に日に高まり、ロータリアン自身からも批判が出始めた。折りも折、1906年ドナルド・カーター（弁理士）への入会勧誘に際し、ロータリーの独善性を厳しく指摘されたことによって、ここに奉仕概念の導入が見られ、ポールは「我等のクラブの親睦のエネルギーを世のため人のため放流しよう」と叫び、綱領第三項を追加し、シカゴ市民としての自覚と貢献を謳った。その結果、1907年、シカゴ市内に公衆便所を設置する運動を盛り上げ、1909年、最初の社会奉仕事業として結実をした。また会員だけの物質的互恵だけを図ろうとする弊害にはこの頃気付き、お互いの事業発展のための智恵を出し合うという精神的互恵主義へと転換されて行き、大体に移行出来たのは1912年ごろであった。このことはアイデアの交換（Exchange of Idea）とされ、例会を中心としたそれらのことは経営戦略のノウハウだけに止まらず、職業倫理高揚運動へ発展することとなり、ロータリー思想が次々と創案発表される力となった。この間、1908年、フレデリック・シェルドン(販売学学校)とチェスリー・ペリー(図書館)が入会し、ポールは「This Rotarian Age」の中でこのことを“天の佑（タスケ）”と感動的に語っている。シェルドンはロータリーに“Service”（奉仕）の語を導入し、それを一般的奉仕概念にまでロータリー的に昇華させ、“He Profits Most Who Serves Best”の標語を発案し、「ロータリーの哲学者」と言われ、理念構築の点で絶大な貢献をしてポールの強力な同志となったからである。又、親睦派として入会したペリーはポールの思想に感銘して良き同志となって、ロータリー拡大と組織構築の功労者として「ロータリーの建設者」と言われる活躍をした。

ポールは、親睦中心派と奉仕概念推進派の対立がはげしいシカゴＲＣの中ではロータリーの拡大、発展活動は無理なことを感じて、ペリーらの献身的協力を得て、1910年、16ＲＣ1500名でロータリー・クラブ全米連合会を結成することに成功した。ポールは会長となり、このことをもってＲＩではＲＩの創立と、ポールをその初代会長と位置づけている。この連合会創立に際して、シカゴＲＣが、連合会はクラブの連合体であり上部組織ではなく、各クラブは絶対自治権を保有して平等関係に立つことを強調し、合意させてこの関係は今も厳密な大原則として存在している。他方1910年、カナダのウィニペグＲＣ創立に始まり、米国外にもＲＣが次々と設立される中で1912年、50ＲＣ5000名でロータリー・クラブ国際連合会が結成された。1911年8月、ポートランドでの第二回大会でシェルドンは、ロータリーの実践倫理を表現した“He Profits Most Who Serves Best”（最もよく奉仕する者、最も多く報いられる）を

発表し、他方、フランク・コリンズは宗教倫理に基づく“Service, Not Self” (1921年頃から Above Self)(超我の奉仕)を発表して、双方ともロータリーの標語(モットー)として採択された。ポールは「改革の足音は1906年の終り頃から聞こえ始め、1907年には本格的なものとなり、1913年まで続いた。この騒動の間に、ロータリーは相互扶助と友愛のためにシカゴに集まった素朴な地域団体から、国際的視野と崇高な目的を持った組織へと発展していったのである」(This Rotarian Age) と述べて、その間の流れを表現している。ロータリーは、標語の採用によってその目的を Service“奉仕”に大転換することになった。綱領と標語によってロータリアン個人、個人が自からの職業生活の中で、どのように具体化するかを示すため「道徳律」(Code of Ethics) が、1915年、サンフランシスコ大会で採択され、正式なロータリーの道徳律として内外に表明された。その後40年間にわたりロータリアンの道しるべとして存在し続けた。
また、初期ロータリーにおける一般奉仕概念の集大成を収録した初の教育書が、ガイ・ガンデイカー(1923〜'24ＲＩ会長) によってまとめられ、1916年「ロータリー通解」(A Talking Knowledge of Rotary) として発行された。これにより職業倫理の高揚を前提としたロータリーの奉仕概念が確立され、初期ロータリーの思考を体系的に総括したものと言えよう。特筆すべきことは、この年代に確立された一般奉仕概念は、現在に至るまで殆んど変化しないで引き継がれているということである。1918年の綱領に“奉仕の理想”(Ideal of Service) の言葉が登場した。
1921年にはエジンバラ大会で国際奉仕概念が導入され、1922年には、ロサンゼルス大会で連合会が国際ロータリー（ＲＩ）と改称され（1243ＲＣ81,000名）ここに世界のＲＣは、同じ定款細則を採用して協調する連合組織体となった。続いて1923年、セントルイス大会では、いわゆる決議23-34が採択された。この決議は、単に社会奉仕の実践基準を定めたものではなく、ロータリー・クラブを「奉仕の理想」を探究するための修養の場と考えるか、或るいは奉仕活動の実践の主体と考えるかの論争に妥協点を見出し、ロータリーの哲学を確定し、更にＲＣとＲＩの役割分担を明確にすることによって、ロータリー運動全般についての実践行動の基準を定めた極めて重要な決議であり、現在でもロータリーの理念と実践法則の基本であることに変りない。「ロータリー・モザイク」の著者ハロルド・トーマス（1959〜'60ＲＩ会長)は「ロータリーはこれをもって成人に達した」と語っている。ロータリーは第一次世界大戦(1914〜'18) にもロータリアンの数を増やし続けている。この間、1923年の我国の関東大震災に対しＲＩの取りまとめにより89,000ドルの送金があり、これを機会に日本ロータリーの活動が本格的となった。(ＲＩ会長はガイ・ガンデイカー)
ロータリーは理論から実践へとの方向づけを強化し、1927年、オステンド大会で目標設定委員会（Aims and Objects Committee）の研究の成果として、現在の四大奉仕部門を名称確定させ、委員会構成の原形となるものを発表した。1929年に始まる世界的大恐慌の中で、ロータリーは初めて会員数を1932〜'34の二年間に僅かながら減少させたが、直後には増加に再び転じた（当時約15万名）。ハーバート・テーラー(1954〜'55ＲＩ会長）は不況下で職業人の倫理基準として「四つのテスト」を1932年に発表し、ロータリー世界へもとり入れられる端緒となった。(1934) この恐慌の中で、ロータリアンとその企業経営が大いに健闘したことが伝えられている。こう言う状況下で戦雲が段々と世界を包みはじめ、1938年、ドイツ、オーストリア、イタリアでＲＣが解散させられ、1939年には第二次世界大戦が勃発した。これに伴い日本の48ＲＣ2142名も1940年にはＲＩ脱退を余儀なくされ、1941年に遂に太平洋戦争に突入した。各ＲＣは脱退後も名称を和風として、会合を続けていたことが歴史的事実として伝えられている。ロータリーは第二次世界大戦のため二度目の会員数減少を1941〜'44の間5%程度見せたが直後に増加に転じている。(当時約23万)
戦争中の1942年にＲＩは、戦後の世界平和に対応するために必要な方策を研究する委員会を設置し、1944年には戦後の世界平和と安全保障に関するプログラムを発表した。この構想に基づいて、全世界のロータリアンの強い影響下で生まれた組織が国連（United Nations）であった。国連憲章起草に、49名のロータリアンが代議員や顧問として参画している。さて、1945年に大戦が終結して、グアムＲＣを復活第一号として各国のＲＣのＲＩ復帰が始まり、日本では1949年に東京ＲＣ他7ＲＣを皮切りに次々と復帰したのである。大戦勃発時21万名のロータリアンは、終了時に24万名、そしてこの1949年には32万名と増強、拡大されている。この間、ロータリーの創始者ポール・ハリスが1947年1月27日、ロータリーそのものと言った一生を終り、シカゴ郊外マウントホープ墓地で、先に逝った生涯の盟友シルベスタ

ー・シールの墓の隣りで永遠の眠りについている。1916年の「ロータリー通解」に続く戦後の教育書として「奉仕こそ我がつとめ（Service is my Business）」1949年、「奉仕の冒険（Adventure in Service)」1955年、「平和への七つの道(Seven Paths to Peace）」1959年、が出版され現在では「ロータリアン必携」などに引き継がれている。特に近年ＩＴ情報の充実が顕著である。1962年にはアジアから初めてＲＩ会長にニテイッシ・ラハリー（インド）が選ばれ、彼は世界社会奉仕（ＷＣＳ）を提唱して現在の姿へつなげる貢献をした。理念表現についてその他「ロータリーの基本的特色」(1963、1976）「ロータリーの目的」（のちに「ロータリーの定義」(1984）となる）、「国際ロータリーの使命」（1991）などＲＩは次々と制定案を決議している。1980年代初頭から決議23-34の改廃論が出て来たり、女性会員の入会が活発に論議され始め、女性会員入会は、1989年にアメリカ最高裁でＲＩが敗訴したことで、定款が修正され、現実面の対応は各クラブの対応に任されることになった。現在、当地区では90名の女性会員がいます。決議23-34は1984年一方的に削除されたが、1986年に復活し、1992年に決議92-286と併用することで一応の決着がついているが最近では、またまた削除提案が出るような流れとなっている。理念は不変でなければなりません。1966年にＷＣＳ（世界社会奉仕）に対する金銭的援助が認められて以来、ＷＣＳや1917年からのロータリー財団への募金活動が推進され、1978年の3Ｈプログラムや、1985年から開始されたポリオやポリオプラスに代表されるように、人道主義に基づく奉仕活動の実践がロータリーの主流を占めるかのような傾向となって来た。
1987年ＲＩは「職業奉仕に関する声明」を発表し、1989年には道徳律に代るものとして「ロータリアンの職業宣言」を採択した。これによって永年停滞していた職業奉仕の理念が改めて確立されたものと言えよう。
従来、社会奉仕の一部として扱われていた「青少年への奉仕」が、時代のニーズに伴って1998年、「新世代のためのロータリー・プログラム」へと名称変更され、内容も明確化された。ロータリーは1997年、121万名をピークとして1998年から最大5%程度の減少を見た。これは三回目の減少であり、翌年から直ちに増加へと反転し一旦2002年に124万名に回復して現在121万名辺りを推移している。一回目が大恐慌、二回目が第二次世界大戦が原因として納得されるのに対し、今回の原因はどこにあるのでしょうか。日本では、1997年の13万余名が約25%余り減少して9万6,000名前後となってなかなか増加に転じない現状にあるのは、不況に大きな原因ありと言いながら、果してそれだけであろうか。本日は特別月間の関係上、ロータリーの始まりから現在までの歴史的沿革について述べてみたが、“温故知新”の言葉の如く歴史をふりかえって、その間に先達たちが真面目な試行錯誤と論議を重ねて、現在のロータリーの理念と組織が確立されていることを忘れてはならない。日本ロータリーでは1960年ごろまでは、戦前の先達のエネルギーをもって真面目に発展したが、その後は増強に反比例してかの様に軟弱化していることが指摘されている。最近のＲＩ会長のメッセージには、対外的奉仕と増強拡大は当然と思うとしても、ロータリアンの教育研修と、クラブの改善発展をあわせて強調しているのが目立つ所である。世界的に特に日本のロータリーが意識の上で低下しつづけていることにすべての原因があるものと、心ある人達は痛切に叫んでいる昨今であります。ロータリーは、親睦を礎石として成り立つと言われているが、管理運営面の改善は慎重に行うとしても、ロータリーの理念は不易のものとしてしっかり守らないとこの巨大な、そして意義ある集団は続かないと思われます。願わくばロータリアンが、ロータリーの理念と目的を充分身につけ、不易流行の意味をふまえてしっかりとした自覚と使命感をもって活動して欲しいものです。その為にはロータリー情報の徹底と、クラブにあっては会長の正しく強いリーダーシップが今ほど望まれる時はないと思われます。
その成果としてロータリー永遠のテーマである会員増強の結果へとつながれば、今年が反転の年として語り継がれることとなるでしょう。愛と情熱でみんなで踏んばりましょう！

ロータリーは平和な世界のミニチュアであり、世界諸国がロータリーの仕組を研究するならば、平和に役立つでしょう。ロータリアンは寛容と友好があまねく実践されれば、すべての人が求めてやまない国際平和がもたらされると信じています。
（ポール・ハリス）